慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	セシリー・マクワース「若きマラルメ」（２）（翻訳）
Sub Title	«The Young Mallarmé» de Cecily Mackworth (1) : traduction
Author	原山, 重信(Harayama, Shigenobu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.43 (2006. 9) ,p.49- 63
JaLC DOI	
Abstract	本論はCecily Mackworth, English Interludes, London and Boston,Routledge & Kegan Paul, 1974 の第2章The Young Mallarmé のうち、ASmell of Cooking という表題の小見出しのついた箇所の約半分の翻訳である。この箇所は、前回の The French Square に直接つながる部分である。紙幅の都合でこの長い箇所を2回に分けて掲載していただくことになる。 ここでは、マラルメの恋愛、ロンドンでの生活における詳細、そしてその中から生まれた詩篇について明らかにされる。詩人の生活実態を知るには貴重な情報であろう。その役に立たないものへの興味などはとりわけ興味深い。また、英訳の一つの大きな傾向も明らかになる。翻訳論的見地から言うと、英語圏の翻訳は、われわれの親しんでいる直訳主義をとらず、内容の エッセンスを伝えることに主眼が置かれるようだ。それは今回掲載の夥しい数の書簡からの引用において顕著である。そこから、多少の誤解、誤訳も生まれる余地もあるように思われるが、ともあれ、書簡を駆使した一つの「評伝」の見事な成果の一端が読み取れよう。今回訳出するに当たっては、あたうる限り元の書簡の出典を調べて注記したが、なお不明な箇所に関しては読者諸賢の教えを請いたい。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060930-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セシリー・マクワース「若きマラルメ」(2)(翻訳)

原　山　重　信

料理の匂い

「自伝書簡」のなかの一見単純な言い方の背後にあった全てのことを理解するためには、我々は年の初めへ、そして中央フランスのヨンヌ県サンスへ戻らなければならない。マラルメはこれを「サンスというこの砂漠」〔1862年7月7日付カザリス宛書簡〕と呼び、それが大層陰鬱なので、そこで起こること全てが灰色に見えると述べた。実際には、それは古代の城壁に囲まれた魅力的な小さい町で、17世紀の立派な家々が壮麗な初期ゴシックの大聖堂の周りに密集し、ヨンヌ川が静かに中央をうねって流れていた。今日では、サンスは発展して繁栄する工業都市になったが、旧市街はマラルメの父が、最初の妻が死に、かなり性急に過ぎる再婚をして、二人の幼い子供たちをヌイイの母方の祖父母のもとに預け、そこに身を落ち着けてからほとんど変わっていない。

マラルメ家は、19世紀フランスの基幹を形成する、良心的で、野心のない、伝統に縛られた公務員の長い家系の出身であり、ステファヌはその足跡を辿るのが当然と思われていたのだった。彼は孤独で、控えめに反抗的な子供だった。デモラン夫妻は優秀な人たちで、厳格に信心深く、預かった子たちを「いとしい母親に相応しく」育てることを決心していたが、子供たちを理解していなかったようであり、また、そうしようとさえしていなかったようである。ステファヌは10歳の頃から一連の寄宿学校で教育を受けたが、成績は常に格別目立たなかった。祖母は、彼のことを不真面目で、無情で、すっかり自己満足していると報告したが、彼が寂しくて、不幸だということに思

い至らなかったらしい。実は、彼は愛情の欠乏に深く苦しんでいたようである。幸せと言えば、親密に愛している妹のマリアと一緒にいられる短すぎる休日にのみ訪れるのだった。当時、彼が 15 歳だった時、マリアは短い病気の後、突然死んだ。それは彼の人生の大きなトラウマの経験であり、一つの存在を破滅させ、惨めさが創造へと昇華される新たな道へとその存在を導き得る経験のうちの一つだった。

この時までに、彼はサンスの高等中学校の寄宿生になっていたが、今は半ば手足の麻痺した父親、貧困に悩まされていた義母、幼い義理の兄弟、姉妹連中からなる、この町の家族と懇意になりつつあった。ステファヌはこの新しい家族のつましい事務的な雰囲気を嫌い、一連の小さなノートに詩を走り書きすることで自らを慰めていたが、それは先生たちに繰り返し取り上げられていた。それらの詩によって、教師たちは彼の性格をさらに一層疑うようになったに違いない。なぜなら、その詩は、ボードレールの作品にもぐりで親しんでいることを、自ずと示していたからだ。『悪の華』の初版は、まさに 1857 年に出版され、即座に発禁になっていた。しかしそれは、その版がいろんな高等中学校に広まって、無数の男子生徒たちに〔詩篇〕「腐屍」のやり方で薄気味悪いソネットを書き始めさせる前ではなかった。

とにかく、その少年が遂にバカロレアに合格して、地方の登記官の実務修習生になり得るようになった時、皆はほっとしたに違いない。

マラルメはその仕事をひどく嫌っていた。それは「人自身だけでなく、それと共にその時間をも」〔1862 年 1 月 17 日付デモラン氏宛書簡〕食い尽くす、と彼は祖母[a)]に書いている。サンス、彼の家庭、かなりの凡庸さをもった生涯の見通し、これが皆、耐え難いものであり、とりわけ逃げ道、意想外なもの、並外れたもの、実際、ボードレールが人生と芸術から求めた「驚異」に欠けているように思われた。

そこで彼は再び『悪の華』のほうに向かった。ちょうど都合のよい 1861 年に新版が出たのだった。その頃、ほぼ同時期に、彼はポーの「構成の哲理[1)]」を発見したようだ。これは彼に非常に激しい影響を及ぼし、彼自身の作品にかくも永続的な感化を与えることになった。既に小中校生の頃、幾つ

かの文芸雑誌にかなり頻繁に載っていたポーの『怪奇と幻想の物語』から翻訳された話に魅了されており、「大鴉」は、当時の非常に多くのフランス詩人に対してそうだったように、至上の芸術作品として、彼に衝撃を与えた。そこで彼は他の詩を自ら翻訳することを考え始め、様々な友人たちからポーの詩を手に入れようとすることに乗り出した。或る程度、ポーは実際に英国訪問の動機を与えたが、とりわけマラルメは、全ての「驚異」がそこから除かれるだろう生活を予期する恐ろしさが、ポーとボードレールによってますます募ったのだった。

彼はもうその時、脱出の憧れに取り憑かれ、家族をがっかりさせすぎないような手段について思いめぐらして、英語の教師になることを思い付いた。彼は全くそのようにして教師をしたくはなかったけれども、それが彼の監獄から自由の期待へと通じる扉だと思った。彼はそれがたくさんの自由時間を与えてくれる職業だということに気付いていたのだ。彼自身がそうであるとわかっていたような、野心的で才能に恵まれた若者は、従って、研究を続け、遂には博士号を取得するものだった。その地点から、即座の想像力が彼を翼に載せて前へと運んだ。既に彼は自分がどこかの大学で教授になるのを見て、大いなる名声を伴い、彼が疑い深くて、扱いにくい祖母[a)]に説明したように、「少なくともきっと平穏なままでいられる」〔1862 年 1 月 17 日付デモラン氏宛書簡〕道へと乗り出した。

デモラン夫妻は、自らの監督から、病弱と怠惰の傾向を思い起こして、躊躇したが、彼がむしろ拒絶されるほうがましだっただろうというほどしぶしぶと、しまいには屈服した。ロンドン滞在の問題をめぐって、再び騒動が巻き起こった。ロンドン滞在をしなければ、試験に合格することは望めないと、今や思われたのだった。折り返し郵便で、二枚舌と不誠実の非難が来た。祖父母は、その旅が彼らの監視から逃れる口実ではないかと疑った。彼らは全く間違っていたわけでもなかった。なぜなら、ステファヌはほぼ同時に友人のカザリスに「僕が次の 1 月ロンドンに飛ぼうとするのは、この息が詰まりそうな、むさ苦しい雰囲気から逃れるためでもあるのだ」〔1862 年 6 月 4 日付カザリス宛書簡〕と書いていたのだから。

その間、二人の友人が彼の人生の中で重要な役割を果たし始めていた。エマニュエル・デ・ゼッサールは地方の高等中学校の教師であり、彼自身より5歳年上で、ステファヌに世界でも非凡な男と目されていた。アンリ・カザリス[2)]は法学生で、その頃パリに住んでいた。三人共詩人だった。三人共、ユゴー、ゴーチェ、ボードレールに魅了され、彼らを熱心に模倣した。彼らはお互いの才能を信じ、お互いの詩を読んでは感動の涙を流し、当時若者たちがよく書いたような、長く、感傷的で、ふざけて、妙に子供じみた手紙をとめどなく交わし続けていた。デ・ゼッサールもカザリスも、パリや地方にたくさんある小雑誌のいくつかに寄稿しており、彼らを通じてマラルメは『ラルティスト』、『〔ル・〕パピヨン』、『ル・セノネ』などに、状況詩や評論を発表し始めた。

既に、彼は自分の天職を確信しており、さらに、早くもこの職業が辿るだろう一般的方向は自覚していたように思われる。既に、彼は芸術を、少数の秘伝を授かった者たちが、自らの人生をそれへの奉仕に完全に捧げることによってその知識に達するかもしれないような、秘伝の宗教とみなしていた。「聖なるものは全て、神秘に包まれている」と彼は最初に発表された記事の中で書いている。「諸宗教は、神に運命を定められた者のみに明かされる秘儀の庇護の中に隠れる。芸術は自分自身の秘儀を持っている[3)]」。既に、彼は自分自身が、自らの人生を或る一つの理想へと捧げることを通じて栄光に到達する、これら「運命を定められた」秘伝を授かった者たちの一人であることを知っていた。それは気分を高揚させる信念であったが、20歳の若者、特に彼自身のように情緒的に恵まれない若者を完全に満足させることはできなかった。この時までに、ステファヌは全く女性を知らないわけではなかった。もしわれわれが最初期の二編の詩[4)]を信じることができるとすれば、ヌイイにおいて英国の少女に対してプラトニックな恋情があったが、15歳の時から（ボードレールノ御陰デ[b)]）彼は時折、売春婦のもとに入り浸り、エミリー某という女性とまる一晩を過ごしさえしてしまった。これらの経験はいずれも、彼に恋愛について多くを教えなかったようだが、それは彼が憧れた恋愛だった。寂しくて、亡くなった母と妹の思い出に取り憑かれ

た彼は、信じられないほど完璧な一人の少女に一体化した、自分にとって母、妹、そして恋人になるような、超人的な美と純潔さをもった或る存在を見つけることを夢見た。実際、彼は一つの理想に人間の姿を取らせる必要があったのであり、1862 年 5 月、彼とデ・ゼッサールが短いパリ滞在の間にカザリスと再会した折に、一つの機会が到来した。

カザリスは、かなりのボヘミアンで芸術好きの若者たちの国際的な集まりに出入りしており、或る日、彼らの多くがフォンテーヌブローの森に出掛けた。一行には、文学サロンを開いているかなり常軌を逸した女性、ガイヤール夫人と、『デイリー・テレグラフ』のパリ特派員の妻、ヤップ夫人が付き添っていた。この二人はそれぞれ娘たちを連れていた。後に文学的パリの主要な詩神の一人になるニナ・ガイヤールと、同時代の回顧録作者に「最も美しい英国の少女たちのうちで、美の最も純粋な典型[5)]」として描かれた、ケイトとハリエット[6)]のヤップ姉妹であった。その時、メアリー嬢とかいう人、才能ある若き画家アンリ・ルニョーと他の数人の陽気な、因襲にとらわれない青年がいた。ステファヌは彼女たち皆にうっとり見とれ、恐らく彼の人生でそれまで味わったことがないほど楽しんだ。少女たちは彼を褒めそやし、婦人たちは彼を魅力的だと思い、この機会を記念するために詩を所望した。若者たちは気ままに、遠慮なく岩の間を疾走し、とても愉快に過ごしたので、執拗に灰色な空もほとんど気に留めなかった。それは参加した人々全員にいつまでもあせない印象を与えたように思われる記憶すべき日だった。小市民階級の縁者たちの息苦しい束縛に慣れていたステファヌにとって、それはちょっとした楽園であり、「断固として、英国の少女たちは素敵だ」〔1862 年 5 月 4 日付カザリス宛書簡〕と彼は書き留めたのだった。

カザリスもどうやらこの見方を同じくしていたようだ。というのは、その後すぐに友人マラルメに「エティー」ヤップがたまらなく好きだと打ち明けたからだ。

続く書状から、ステファヌ自身もエティーに深く心を動かされ、彼女の中に自分が探し求めている理想を垣間見たのは明らかなように思われる。カザリスの手紙は、ステファヌに自分自身の気持ちを早く調整するように強いる

ものだった。多分、この彼の感情の発展段階では、その現実のあらゆる密接な関係からして、自分にとって真の女性だとして彼女が自分のものだと主張しようとするよりはむしろ、最も親愛なる友カザリスの所有物として、彼女を遠くから崇拝するほうが彼には相応しくさえあったかもしれない。どのみち、この時点から彼がアンリを「兄」と呼び始めたのは、かなり際立ったことだ。一方、エティーは極自然に「我々の妹[7)]」になったのだった。

> 彼女は、僕の夢の中で、シメーヌ、ベアトリーチェ、ジュリエット、レジーナ[c)]の傍らに、或いはこう言ったほうがよいと思うが、僕の心のnなかで、13年間僕の妹だった、そして君たちみんなと知り合いになるまで僕のたった一人の熱愛する人だったあの哀れな若い亡霊の傍らに、位置を占めることだろう。彼女は、死んで僕の妹がそうであるように、生きていて僕の理想になるだろう［彼は同じ折に書いた］。〔1862年7月1日付カザリス宛書簡〕

彼女は愛され得なかったのだから、崇拝されることになったのだ。

カザリスは、このような紛糾によって心が乱されてはいなかった。ぞっこん惚れ込んでいた彼は、あの有名なピクニックに参加していた全ての友人にエティーの「肖像」を作るように懇願した。アンリ・ルニョーはデッサンをすることになり、その他の人たちは詩で彼女を称えることになった。マラルメは「これを僕の代表作にしたいから、身震いしながら」〔同上書簡〕仕事に取りかかった。様々な出来事と、恐らく彼自身のエティーに対する煮え切らない思いのために、翌年までその詩の完成はならなかった。その時までにはその主題は変わっていたが、歴史的証拠から、彼が最初に思い浮かべた、或いは思い起こしたのは、エティーだったに相違ない。彼女は、半ば現実の少女、半ば過去からの幽霊として、黄昏時の街路に光り輝く幻[8)]のように現れたのだった。

そして僕はあの光の帽子を被った妖精を見る思いだった

彼女はかつて、甘えん坊の僕の麗しい眠りの上を
通り過ぎた、いつも緩やかに握った彼女の手から
香り高い星々の白い花束を雪のように散らすがままに。

少なくとも一時(いっとき)マラルメは、陽気で活発なエティー・ヤップと幼少期の失われた愛との間のこの混同を心に抱いていた。確かに、この代理形成の幾分かは、彼女たちの関係の中に常に存在していたように思われる。

エティーは、カザリスの愛によっては手に入れられず、いわば禁断のものになっていた。自分のことをドン・ファンだと自惚れていたステファヌは、冷たくされていると感じた。「君は自分が有頂天になっていることがわかっているか。そしてそのことで僕が何と君を羨ましいことか！」〔1862年6月4日付〕とマラルメは友人カザリスに書いたのだった。何かが起こらなければならなかった。そして、町の裕福な家の住み込み家庭教師としてサンスに来ていた若いドイツ女に彼が目を留めた時、機会は訪れた。彼は初めに「うんざりして、哀愁を帯びた」〔1862年8月4日付カザリス宛書簡のパラフレーズ[d)]〕彼女が河畔を歩いているのを見かけたのだった。彼女の気分は彼自身の気分と合致したのであり、それに若い外国人のほうが町の重々しく付き添いの付いた少女たちよりも容易に近づくことができただろう。ただ「S. M.」とだけサインした手紙は、ほんのうわべだけの恋心を表すものだった。マリア・ゲルハルトは反応し、怯え、退(ひ)いたが、遂に会おうという気になった。ステファヌの手紙は、ますますなまめかしくなった。「今僕の苦しみは絶望的になりました。数日前から僕はほとんど気が狂っています」〔1862年6月と想定されるマリア・ゲルハルト宛書簡〕。しかし同時に彼は「僕が誘惑しようと決心しているこの小さなドイツ女」〔1862年7月7日付カザリス宛書簡〕に無頓着に言及しており、便箋を汚した涙は、洗面器から滴となって落ちていた〔同上書簡を踏まえた表現〕。

その時突然、彼自身が分かるような理由もなく、事態は変わった。ほとんど毎日毎日、この拗ねた誘惑者は自分自身の仕掛けた罠にはまったことを認めざるを得なかった〔1862年8月4日付カザリス宛書簡を踏まえた表現〕。

自分自身の感情の力と意外性に当惑して慌てた彼は、いつものようにカザリスとデ・ゼッサールに打ち明ける。

> 僕はマリーのことを考える以外何もできない。当初、彼女は田舎に行っていて、僕は魂の抜け殻のようだった。（中略）今や彼女は帰ってきているが、僕の思いも心も完璧に彼女のものだから、机から一枚の紙を取る時、彼女のことではないことをその上に書くことはほとんど冒瀆のように思えた。〔1862 年 9 月 25 日付カザリス宛書簡〕

友人たちは心配してまごついた。マリーは貧乏で、少しも可愛くなくて、あまり頭も良くなかった。彼女は芸術にも詩にも興味を持たなかったし、彼らの友人〔マラルメのこと〕と共通のものは何もないように見えた。彼らは彼が彼女の中に何を見たのか理解できなかった。本当にステファヌ自身もわからなかった。「はっきりした原因がない何か磁気のようなものによって、僕は彼女のほうに惹き付けられている」〔1862 年 10 月初頭のカザリス宛書簡〕と彼はカザリスに書いた。それから「彼女は僕の心の中にきっぱりと入り込んだ確かな眼差しをしている」〔同上書簡〕。

この関係が発展した仕方を考慮すると、彼は喪った妹に代わるもう一人のもっと近づき易い代役を発見しただけだったと推定しなければならない。友人たちへの熱情的な逆りの一行一行は、彼の恋心の非現実的な性質を露わにしている。寂しさ、愛情不足、カザリスとエティーの手本が重ね合わさって、平凡でいささか愚かな若い女性を、理想化された過去から現れた光り輝く幻へと変容させたのである。既に、彼はマリーと共に、彼の想像の産物であるあの島に住んでいた。ここで 22 年後には、自らが妹と共にさまよい、彼女の導きの下に「明晰な輪郭、空隙」を発見し、それを純粋詩の在処と見なすのを描くことになるのだ[9)]。

実在のマリーがどうだったか、なかったかに関しては、友人たちに「僕と一緒に過ごした 2、3 年後には、彼女は僕自身の似姿になっているだろう」〔同上書簡〕と請け合って、彼は非難や警告を脇に払い除ける。

当時は、重大な責任を背負い込まなければ、社会的地位のある女性をものにすることはできなかった。結婚の問題が不可避的に生じた。この問題がフォンテーヌブローで切り出されたことは意義深い。ステファヌはマリーをここへピクニックに連れ出したのだ。恐らく、彼はあの有名なピクニックの恍惚とした気分を取り戻すことを望み、うかつな約束を取ることに十分成功した。彼が帰ってみると、事はたやすくはなくなっているように思われたに違いない。彼はまだ未成年者で、家族の承諾を得る望みはなかった。ともかく、三人の友人たちは、自らの革命的な意見を自慢し、結婚は天才には致命的だと信じた。マラルメは多分、他の人たち〔デ・ゼッサールとカザリス〕よりは因習にとらわれていた。彼は動揺し、自らの義務について話した。デ・ゼッサールとカザリスは議論し、脅して、遂には「試し結婚」をすることで妥協するように彼を説得した。この大胆な解決法は、突然家族が、長い間議論になっていたロンドン滞在を認めたことですらすら運んだ。本当に、家族が彼をせき立てる著しい性急さからすると、どうやら彼らはマリーの問題を嗅ぎつけ、彼のために彼らが心配した自由よりもさらに危険だと思ったらしい。勿論、彼がマリーを連れて行くかもしれないなどということは、決して彼らには思いもよらなかった。若者たちはと言えば、彼らは激しく恋をし過ぎていたので、実際的な問題を苦にしなかった。ステファヌがカザリスに説明したように、「彼女を連れずに出発していたとしたら、それが僕を殺すのと同様に彼女を殺していただろう。或いはむしろ、そんなことは全く単純に不可能だったろう」〔1862 年 12 月 4 日付カザリス宛書簡〕。そのようにして彼らはソーホーに着いた。ここはフランスの雰囲気にもかかわらず、ステファヌとマリーは「本当の英国の家庭[e)]」を営んでいると感じた。彼らはむき出しの火で暖を取り、石炭粉まみれの革の肘掛け椅子に座り、夕食にワインの代わりにエール〔英国ビール〕を飲んだ。黒猫がコンロのそばでごろごろと喉を鳴らした。ステファヌが本を読んだり、書きものをしたり、英語を勉強したりしている間に、マリーは編み物をしたり、刺繍をしたりした。赤い腕の小さな女中までいて、石炭を持ち込み、マントルピースの上にジャンヌ・ダルクか、ビュフォンの銅像が何故ないのか不思議がった〔1862 年 11 月

27 日付カザリス宛書簡を踏まえた表現〕。彼女の他のフランス人雇い主たちは皆、英仏海峡の向こうから、多かれ少なかれ慌ただしい出発の間に、この立派な社会的ステータスの究極のシンボルを首尾良く運ぶことができたのだった[10)]。

多少の災難があったことも確かである。厳しい気候の覚悟ができていなかったステファヌは、風邪を引きひどく咳をしたのだった。その上、下船してから 24 時間もたたないうちに、持ち金のほとんどを騙し取られた。彼は苦情を訴えたが、下級裁判所がその泥棒に有罪の判決を下すのを拒否した時にはあまりに驚いた。「人を騙すのはここでは許されていて、裁判所は、そんなふうにペテンにひっかかってしまうのは僕が馬鹿なのだと言って、僕の訴えを却下したのだ」〔1862 年 11 月 13 日か 14 日のカザリス宛書簡〕と彼はカザリスに報告した。

弁護士がデモラン家から必需品のためのお金を預けられたが、彼らが「僕たちの命を救ってくれるだろう郵便配達の二度のノックがしないかと無性に耳をそば立てる……ヨブのように貧乏」〔1862 年 11 月 27 日付カザリス宛書簡を踏まえた表現〕だと感じた苦しい日々があった。彼らはあまりに恋していたので、用心しなかった。「二人で貧乏なのは、幸せだということだ」〔1862 年 10 月初頭のカザリス宛書簡のパラフレーズ〕とステファヌは、フランスを発った直後に断言していた。子供のように、彼らは小さなドイツ製の振り子時計に誘われ、最初の散歩に出掛ける気になり、それを 3 シリングで買って、その親しみのあるチクタクという音に聴き入って、自らの粗食を慰めた〔1862 年 11 月 27 日付カザリス宛書簡による〕。

その辻広場（スクウェア）では、いつも何かが行われていた。手廻しオルガン、赤い帽子を被った猿、ギターを弾く黒人、コーラスで歌う「ランカシャー・ボーイズ」。毎日、「パンチとジュディー」の操り人形劇もあった[f)]〔1862 年 11 月 13 日か 14 日のカザリス宛書簡による〕。ステファヌは見世物が大好きで、「ペニー貨やファージング貨〔4 分の 1 ペニー〕を惜しみなく雨霰と投げ与える」〔同上書簡〕ことで、それに報いた。（「それは何という喜びだろう」と彼は有頂天になって解説した。「そして僕は何という楽しみをそこから得

ていることか」〔同上書簡による〕。）また、とめどなく歌い続けるストリート歌手もいた。そのうちの一人は、マラルメたちの気前よさを刺激しようと願って、窓の外で「ラ・マルセイエーズ」を飽きずに歌った。マリーは、その男はただの怠け者で、もっとペニー貨をあげるのに相応しい本当の貧乏人がいると言って反対した〔1862 年 11 月 27 日付カザリス宛書簡を踏まえた表現〕。しかしステファヌにとっては、さすらいのミュージシャンは、自由の象徴であり、カザリスに次のように書いた。

> この男は通り通りで音楽を奏でている。それは、弁護士がそうであるのと全く同様に、一つの仕事だ。しかし、これは完璧に役に立たないという利点を持っている。これ以上に素晴らしい生活を想像できるかい。陽気な曲や哀しい曲を目に入った最初の窓に届け、その窓が開いて、天使の顔を見せてくれるか、年老いた鬼婆の顔が出てくるかもわからずにこうしてさまよい歩き、スズメのため、敷石のため、辻広場（スクウェア）の病的な木々のために演奏するなんて〔1862 年 11 月 27 日付カザリス宛書簡〕。

その季節のロンドンは、霧に包まれていた。霧は鎧戸を通して立ち込め、「ここでしかわからない特別な臭い」〔散文詩「パイプ」〕を運んできた。その若い男女が危険を冒してハイド・パークまでやって来た時、「触知できないが、実在する、広大で、その向こうに見事な、密生した木々の病的な輪郭が見える円形の領域[g)]」〔1862 年 12 月 30 日か 28 日のカザリス宛書簡のパラフレーズ〕に自らが覆い包まれているのを感じた。

この距離の錯覚、この彼自身と現実との間隔は、マラルメの最も深い創造的本能と合致していた。この詩的空間が自分にとって帯びるだろう意義の全てを、彼は理解する用意がまだできていなかったが、その半ば目に見えない都市の魅力に即座に答えたのだった。天然光と過酷な現実は、ここでは覆い隠され、取り除かれていた。輪郭が溶解し、何も確かではなく、全てが可能になった。それが、彼がますます密接に結び付くようになっている彼の主人公たち、ためらい疑うハムレット[11)]に、そしてその年に「ユラリューム」

を翻訳し始めていて、既に「この地上世界の誇りとなる最も偉大な存在の一人[12)]」と見なしていたポーに相応しい気候だった。彼の青年期の第三の英雄は、その憂鬱がパリと根深く結び付いているボードレールであり、彼が崇拝していたこの詩人を排斥した[13)]のがこの初めてのロンドン滞在の間だったことは意味深長である。

マラルメはこの時、イギリスの生活様式のヴィクトリア朝版に苦もなく順応したように見える。彼は、この最初のロンドン滞在の日々に、暖かく薄暗い部屋の居心地のよい安全に快く身を落ち着け、マリーがいる所で「同じ空気を吸い……同じ物を食べ、お互いの衣服に馴染み、同じペンで書くことから成る共同生活」〔1862 年 12 月 5 日付カザリス宛書簡のパラフレーズ〕のなかで歓喜し、静かに一種の魔法に捕われていた。程なく、恐らく僅か数日のうちに、彼は完璧な幸福を経験し、幼年時代の愛の緑の楽園を再建し、彼ともう一人のマリーが、完璧な安全の中で、彼らがかつて知り得た唯一の真の家庭で一緒に遊んだその数年を追体験していた。

訳者後記

本論は Cecily Mackworth, *English Interludes*, London and Boston, Routledge & Kegan Paul, 1974 の第 2 章 The Young Mallarmé のうち、A Smell of Cooking という表題の小見出しのついた箇所の約半分の翻訳である。この箇所は、前回の The French Square に直接つながる部分である。紙幅の都合でこの長い箇所を 2 回に分けて掲載していただくことになる。

ここでは、マラルメの恋愛、ロンドンでの生活における詳細、そしてその中から生まれた詩篇について明らかにされる。詩人の生活実態を知るには貴重な情報であろう。その役に立たないものへの興味などはとりわけ興味深い。また、英訳の一つの大きな傾向も明らかになる。翻訳論的見地から言うと、英語圏の翻訳は、われわれの親しんでいる直訳主義をとらず、内容のエッセンスを伝えることに主眼が置かれるようだ。それは今回掲載の夥しい数の書簡からの引用において顕著である。そこから、多少の誤解、誤訳も生まれる余地もあるように思われるが、ともあれ、書簡を駆使した一つの「評伝」の

見事な成果の一端が読み取れよう。

今回訳出するに当たっては、あたうる限り元の書簡の出典を調べて注記したが、なお不明な箇所に関しては読者諸賢の教えを請いたい。

註（数字は原註、アルファベットは訳註）

1）『フランス評論』誌、1859 年 4 月 24 日に、ボードレールによる翻訳で発表された。

2）アンリ・カザリス（1840 ～ 1909）は、ジャン・ラオール（ラホール）Jean Lahor という筆名のほうがよく知られている。彼は後に法学をやめて医学を学ぶ。マラルメとの友情と自身の魅力的な二流詩人としての名声によって、ヴェルレーヌをはじめとする多くの文士の患者が訪れた。ジョアンナ・リチャードソン『ヴェルレーヌ』（Joanna Richardson, *Verlaine*）, Weidenfeld & Nicolson, London, 1971, pp.233-4. を見よ。

3）「芸術の異端――万人のための芸術」、『ラルティスト』、1862 年 9 月。

4）「彼女の墓穴は掘られている」と「彼女の墓穴は閉じられている」。

5）モーリス・ドレィフゥ『私がどうしても言いたいこと』（Maurice Dreyfou, *Ce que je tiens à dire*）, Paris, 1912, p.59.

6）アンリ・モンドール博士によるマラルメの『書簡集』の第 1 巻への註〔p. 26.〕に拠れば、エッティー・ヤップの正式の名前はジュリエットとされているが、サマーセット・ハウスで参照した彼女の出生証明書は、「ハリエット」が正しいことを立証している。

7）フランスの注釈者たちはこれまで、マラルメの作品全般に亙って、妹のモチーフを跡付けるのに熱心で、この時代の詩人たちの間でまだ一般的だったロマン主義の因習を無視する傾向があった。シャルル・モーロン『マラルメの精神分析入門』、Neuchâtel-Paris, 1950. を見よ。

8）詩篇「まぼろし」は 1862 年にサンスで書き始められ、1863 年にロンドンで完成した。

9）「プローズ（デ・ゼッサントのための）」

10）家庭のマントルピースからの「芸術的な銅像」は、この後も長くフランスの中産階級の生活において、象徴的な役割を演じ続けた。1940 年 6 月の市民移動の間に、難民たちが、故郷から何百マイルも最も大切な宝物を積み、マラルメによって次のように描かれたまさにこれらの物を頂きに載せた手押し車、乳母車、自転車を疲れ果てて押している姿がしばしば見られた。「ジャンヌ・ダルクか、袖飾りを付け、指にはペンを持ったド・ビュフォン氏か、兜を被った〈地理学〉〔を表している芸術的な銅

像〕」〔1862 年 11 月 27 日付カザリス宛書簡〕。

11）何年も後、メリー・ローランから誰がお気に入りの英雄かと尋ねられた時、彼は「ハムレット」と答え、青年期から後、ほとんど愛情を込めて、自分自身を「われわれから人生の初めに消え失せる青年」（「芝居鉛筆書き」のなかの「ハムレット」）と比較した。

12）1876 年 12 月 13 日付、ヘレン・ホイットマン宛書簡〔原文は ‘one of the most magnificent beings who *has* ever honoured this earth’ となっている。マラルメの書簡原文は ‘un des êtres les plus magnifiques qui *aient* honoré cette terre’（強調はいずれも訳者）であり、先行詞は ‘êtres’ = ‘beings’ なので、‘has’ は ‘have’ とすべきかと思われる〕。

13）「或る現代詩人の愚かさは、行動が夢の妹ではないことを嘆くにまで至ったことだ」と彼は 1863 年 6 月 3 日にカザリスに宛てて書いた。その指し示すものは、ボードレールの『悪の華』における「聖ペテロの否認」である。

a） Stéphane Mallarmé, *Correspondance 1862-1871*, recueillie, classée et annotée par Henri Mondor avec la collaboration de Jean-Pierre Richard, Gallimard, 1959.（以下『書簡集』と略記する）では、「デモラン夫妻宛」（p.15.）となっているので、筆者は「祖母」に宛てても書かれているものと解してこのように書いていると思われる。*Documents Stéphane Mallarmé*, Ⅴ, présentés par Carl Paul Barbier, Nizet, 1976. では、「デモラン氏宛」（p.348.）と訂正されている。

b） この箇所の原文は ‘Baudelaire *obligens*’ となっている。ラテン語の記述と考えられるのでカタカナで記した。‘obligens’ の意味に関しては、複数の識者に問い合わせたが、現時点では正確には把握できていない。動詞 obligo, *are* の現在分詞ならば、obligance となるはずである。各位のご教示を賜りたい。

c） この箇所の原文は ‘Chimène, Beatrice, Juliet, Régine’ である。『書簡集』では ‘toutes les Chimènes, les Béatrices, les Juliettes, les Regina’（p.35.）、さらに *Documents Stéphane Mallarmé*, Ⅵ, présentés par Carl Paul Barbier, Nizet, 1977.（以下『マラルメ資料』と略記する）では ‘toutes les Chimères, les Beatrices, les Juliettes, les Regina’（p.40.）となっている。筆者は、『書簡集』の ‘Chimènes’ を踏襲しているのはやむを得ないにしても、単数形で記しているのは不可解である。‘Regina’ の綴りもわざわざフランス語風に変えられている。ここでは、最も信頼のおける『マラルメ資料』のテクストに従って、「ベアトリーチェ、ジュリエット、レジ

ーナといった全ての空想の女性たち」とでも訳すほうが正しいと思われる。

d)　筆者は『書簡集』の自由訳を引用の形で示していることが多いので注意されたい。少なくともこの段落の以下の引用は全てそうである。可能な限り出典をカギ括弧で示したが、他にもこうした箇所が散見される。

e)　この箇所の原文は ‘a real English home’ である。これ自体は何の変哲もない表現だが、フランス語の原文を『書簡集』から探すとなかなか見つからない。敢えて言えば、1862 年 11 月 14 日付カザリス宛書簡の中に ‘un vrai ménage anglais’（p.57.）（本物のイギリスの所帯道具）という類似の表現が見出される。筆者はこの部分を誤読したのだろうか。

f)　筆者は ‘Lancashire Boys’、‘a Punch and Judy show’ と固有名を出しているが、マラルメの書簡原文にはこうした記述は見られない。これは英国人ならではの知識に基づく詳細記述であろうか。『書簡集』ではそれぞれ ‘les bandes de Lancashire’、‘Polichinelle’（p.57.）となっている。『マラルメ資料』では ‘de’ が ‘du’（p.67.）と修正されているだけであとは『書簡集』と同じである。

g)　「円形の領域」と訳した原文は ‘circular sphere’ である。この英語自体が冗語表現であるが、マラルメの書簡原文は『マラルメ資料』では ‘cirque’（p.95.）となっている。この箇所に関しては、日本語版全集（『マラルメ全集Ⅳ、書簡Ⅰ』、筑摩書房、1991.）には「円形競技場」（p.96.）とある。これは、そうした建造物ではなく、空気が創り出す層のようなものを指していると考えられる。